

ニコラウス・クザーヌスと道元における〈世界〉

笠井 貞

世界の存在とその意味、そして世界における人間の位置を問うことは、哲学・宗教における根本問題の一つであろう。「世界」を、どのように思惟しているかの問題を中心にして、本稿ではドイツのニコラウス・クザーヌス (1401~1464) と道元 (1200~1233) とを比較する。両者は、その時代や国を異にし、キリスト教と仏教という異宗教の伝統下で思索し行動したのであるが、両思想の特徴の差異性と類似性とを検討しよう。

クザーヌスの根本真理は、キリスト教の神である。世界は神による創造であるということが、彼の思想の前提になっている。⁽¹⁾ さて、クザーヌスが、世界をどう把握しているかを見よう。「世界即ち宇宙」(mundus sive universum) は、その可能性、即ち質料が、それ自体を超えて拡がることがないという欠陥から、世界は現実にあるよりも大きくはあり得ない。この世界は、その限界

をなす世界より大きいものが現実にはあり得ないから、限界がない。即ち、世界は、無限なものである。しかし、それは否定的無限 (negative infinitum) ではなくて、限界がないということでの無限、即ち欠如的無限 (privative infinitum) なのである。しかしながら、世界は、縮限された方法でしか、実際には存在しない。世界は、単に絶対的に神的存在に由来する被造物だからである、という。このように、彼は、世界・一切存在を神の被造物とする。結局、彼が、無限の神に基づいて、世界を欠如的とはいえ、無限と抱えた点に重要な意義が認められる。アリストテレス以来の伝統は、宇宙を有限なものとして抱えていたのであるから、この世界は神の創造によるとするキリスト教の教説を根拠に、クザーヌスは、およそ次のようにいう。⁽²⁾ 世界における万物は、唯一で無限な形相たる神の似姿 (imagō) でありながら、無限な形

相を有限な方法でしか受け取れないので、一切の被造物は、「限られた無限」*infinitas finita* 或は、「創造された神」*deus creatus* であることになる。それ故に、被造物は、これよりも善い方法では存在し得ない方法で存在している。最も恵み深い神は、世界の万物に受け取ることが可能な方法で、存在を分配するから、世界の被造物は、神から惜しみなく与えられたそれ自体の完全性で落ち着いているとする。要するに、クザールヌスによれば、世界は、神により造られたものであるから、その本性の条件、即ち質料の面の制約が妨げない限りの最善の状態で、現実には存在しているのである。そのため世界の万物は、神から受け取っている、それ自体の存在を、神の贈物として非常に大切に、それが不滅に完成され保存されることを願っているというのである。

神と万物との関係を示す、クザールヌスによる論理は、「包括」*comprehensio* と「展開」*explicatio* という概念である。神は、万物が神の内に存在するというにおいて、万物を包括するものであり、又、神自身が万物の内に存在するというにおいて、万物を展開するものである。この包括と展開がどのようにして起るかは、知的理解を超えているとする。しかしながら、次のことは知られるという。⁽³⁾ 神は、万物の包括と展開である。神が包括である限り、神の内に存在する一切は神自身である。そして、神が展開である限り、一切の内に存在する神は、それらがある所のものである、と。こうして、「神は一切を通して一切の内にあり、

一切は一切を通して神の内にあり」(*deum per omnia esse in omnibus et omnia per omnia esse in deo*)⁽⁴⁾ という。現実には存在する各個物は、世界がそうであるように、直接的に神の内に存在するのである。神は、世界を媒介にして一切の内にいるが、それは神の部分が各個物の内に分与されているのではない。神はその全体において各個物の内に存在する。そして、たとえ、世界がどのような物の内にも、異なった方法で存在し、又、どのような物も、世界の内で、異なった方法で存在するにしても、世界の内では、世界それ自体であるとしている。世界における万物に関して、更に、クザールヌスは、大略、次のようにいう。⁽⁵⁾ どのような物も、他の物と、すべての点で類似することはできなかったから、万物は異なった段階で存在することになったのである。こうして、万物はそれらが、別のより良い方法で存在し得なかったから、現にある通りのもののなのである。従って、万物は、どのような物の内にも落ち着いている。一つの段階は、他の段階なしに存在し得ないからである。例えば、身体の各部分のように、すべての部分は相互に助け合い、そのために、どのような部分も、可能な限りの最善のあり方で、現にある通りのものになっているという。

前述した包括・展開の論理を、具体化するのが、「縮限」(*comprehensio*) の概念なのである。クザールヌスの所説によれば、世界は、縮限された最大のもの、一なるものであり、縮限された諸対立に先行するものである。世界は、縮限された状態で無限なのである。

要するに、世界は、神の「縮限」なのである。又、クザーヌスは、別の箇所⁽⁷⁾で、以下のように述べる。世界は、絶対的な最大性の限界に到達しない。そこで、万物は最大のもつと最小のものとの間に、最善の方法で存在している。そして、神は、世界と個物の、始めて中間で終りであるから、万物は、たとえ上昇しても下降しても、中央へ行っても、神に接近するのである。ところで、世界における万物の連結は神によるのであるから、万物は、たとえ區別があつても連結されている。それ故に、一なる世界を縮限している諸々の類の間には、中間の類で一致するという方法で、下と上の類の連結があり、又、異なる諸々の種の間には、一つの類の最上種が、すぐ上の類の最下種と一致するという方法で、「結合の秩序」*combinationis ordo* が成立している。このようにして、一つの連続した完全な世界（宇宙）が存在しているのである。

さて次に、世界の三一性の問題についてであるが、概要は以下のようになる。⁽⁸⁾ 神は、現実に神たる父・子・聖霊の *Persona* の三位一体であるが、世界の三位一体・三一性は、それとは異なると、クザーヌス⁽⁹⁾はいう。神の三位一体の三項から、世界の三一性の各相関項が下降するのであるが、神の三位が、どれも神であるのに対して、世界の三一性の相関項の夫々が世界ではあり得ず、それらの相関項が一緒になると世界になるという。神において、又、神によって、万物は三性の統一において存在する、即ち、世界における一切のものは、極大と極小の中間に、夫々の段階に従

って、より多く、或はより少なく、三位一体に類似した方法で縮限されるという。世界の統一は、可能性と、総括の必然性と、これらの結合と、換言すれば、可能態と、現実態と、結合の三性で成立しているとする。

そこで、世界の可能性、即ち、「質料」*materia* についての、クザーヌスの見解を概観しよう。⁽⁹⁾ ギリシアの哲学者達は、クザーヌスもいう通り、すべて「無からは無」*ex nihilo nihil* という命題を根本にしており、絶対的な可能性の内に事物の一切が可能的に存在するとしていたのであるが、それに対して、クザーヌスは、〈知ある無知〉により、絶対的な可能性は存在することが不可能であると主張する。即ち、絶対的な可能性は、神の内では神であるが、神の外では不可能である。神は別として、一切は必然的に縮限されているのである。結局、一切の被造物は、可能態と現実態との合成であるが、その現実態は、神の創造において現実態を与えることから必然的に来ているのである。質料に関連して、ここで、「形相」*forma* について触れる必要がある。⁽¹⁰⁾ クザーヌスにおける神は、世界における万物の起動因・形相因・目的因である。諸形相の形相、諸々の真理の真理が、唯一の神なのであり、神は *Verbum*（聖言）によって万物を創り出す。所詮、世界における一切の被造物は、すべて縮限されていて、神の働きより無限に低下している。神だけが絶対であり、他の一切は縮限されているとするのである。

クザールヌスにおいては、世界における万物は、すべて、可能態と現実態とその結合の運動から成り、これらの三つは、何れも他のものなしには絶対に存立し得ない。そして、世界におけるどのような二つの物も、完全に同等ではあり得ない。又、地・空気・火、その他何でも、それを世界（宇宙）の固定した不動の中心にすることはできないとして、クザールヌスは、アリストテレスや、スコラ哲学の宇宙論と異なる立場をとる。それ故に、クザールヌスによれば、世界の中心は、周囲と一致する。従って、世界は、周囲を持たない。若し世界が中心を持つならば、世界は周囲を持つことになるが、そうになると、世界は、それ自体の内に、それ自体の始めと終りを持つことになる。そして、世界自体は、他の或る物によって限定されて、世界の外部に他の或る物と場所とが存在することになるが、これらは真理でないとする。

天のすべての部分も、必ず運動をしているのであり、地球は世界の中心ではなく、星と同様に運動をしているものでなければならぬと、クザールヌスは考える。要するに、世界は、中心或は周辺をどこにも持たないこと、地球は星と同様に運動をしているということを、彼は主張しているのである。又、地球も太陽も月も、一切の星も同様な物質的構成を持っているので、世界の中で、地球が最悪・最低というのは真ではないとする。畢竟、クザールヌスによれば、世界の中心は神であり、神は同時に万物の周辺である。そして到る所に存在しているけれども、どこにも存在していない

神が、世界構造の周囲であり、中心である。

道元の根本真理は、仏教の「法」dharmaである。世界は、縁起としての法の所生である。道元は、『正法眼蔵』で孔子・老子の思想を、種々の点から批判している（四神比丘）。道元によるこれらの批判の可否の検討は本稿の課題ではないので差し置く。道元はその箇所において、孔子・老子が、「三千大千世界」を知らないこと、又、世界の有辺際（有限）・無辺際（無限）を知らないこと、或は極微色や刹那量を知らないことなども指摘している。『正法眼蔵』において道元は、例えば、「無量無辺の三千大千世界」（古鏡）などと用いている。ところで道元は、「行仏威儀」の巻で、以下のように説いている。尽大地（全世界）といつても、ただ三千大千世界を思い浮べ、又、僅かに一州一県を考える人もいる、などとして、「極大同小、極小同大」と、かの『信心銘』の語句を引用している。即ち、大小を超えた立場からは、極大は小に同じく、極小は大に同じである。数字のあるうちは、大いっても極大とはいえない。極大は無辺際（atitha 無限）である。極小も無際限である。微塵にも大きさがあるから極小ではない。これを要するに、大にも小にも際限がなく、無限大は無限小なのである。仏教における世界は、無限で無始無終であり、道元はその系譜を引いている。

道元は、「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住

して、究竟の功德を成ぜり」(山水經)という。即ち、今、我々の眼前に見る山水(自然)は、古仏の道そのものを現わしている。山は山の、水は水の法位に住して、各々の世界を究尽した功德を具現しているという。それは、「空劫已前の消息なるがゆへに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆへに、現成の透脱なり」(同上)とする。この「山水經」の巻において、道元は、道楷の「青山常運歩」を拈提している。山を山たらしめている根源の法は、不斷に働いている。この法の働きにより、山の運歩は、刹那生滅して、風よりも速いが、又、法の働きの故に常住の姿を保持している。若し山の運歩を疑う人が居るならば、その人は自己の運歩をまだ知っていない。自己が自己としてあるとき、法が不斷に働いていることを覚知していないからであるとする。要するに、道元は、山の外に自己を置いて、山を対象化して考えているのではない。自受用三昧の時、山水、世界と自己との対立はなく、世界は、主体たる自己を包み、世界自体が主体なのである。

いわゆる「水四見」の譬を挙げて、道元は、次のように説く(山水經)。およそ、水の見方は、見るものの種類によつて違がある。いわゆる水を天人は璽珞(目に見えぬ珠玉の飾り)と見る。しかし璽珞を水と見るのではない。人間が何と見る形を彼等は水と見るのであるうか。天人が璽珞と見るものを、我々人間は水と見る。又、天人は水を妙華と見るというが、我々の見る花を水として用いているのではない。餓鬼は、水を猛火・濃血と見

る。竜魚は、水を宮殿・楼台と見るという。或は七宝・摩尼珠と見る。或は樹林・牆壁と見る。清淨解脱の法性と見たり、真人體と見たり、身相心性と見たりするのとは、仏法の立場からである。しかし普通の人間は、これを水と見るのである。以上のように、道元は、唯識學で用いる比喻によつて、同一対象も見る者の主観によつて異なるとする。

こうして、道元は、諸類の見る水は様々あるが、本来の水、水そのものは、結局、どこにもないようであり、諸類の水も実在しないように思われる。それ故に、諸類の水は、心・身・業・自・他などによるのでなくて、水によってだけ水の透脱があると主張する。更に、道元はいう。今のこの世界が何ものの能成所成か明らかにすることは難しい。この世界は、空輪・風輪に懸るとかいうのは、浅はかな見解で臆測することである。何か依り懸る所がなくては安住できないと、人は考えるので、そのようにいうのであるとして、インド仏教の世界觀を批判している。

仏教者たる道元において、仏祖は法を具現した人であり、又、水は法の働きの現成した而今の水なのである。道元は、水の道は上下縦横に通達するという説示に関連して、次のようにいう(山水經)。「金光明經」の中に、「火風は上にのぼり、地水は下にくだる」とある。ここで上下は、仏道の上下であり、仏道で本来は上下はない。いわゆる地水が流れて行く所を下とするのであり、下を地水の行く所とするのではない。同様に火風の行く所が上な

のである。仏教において世界には、必ずしも上下とか四方八方の差別があるわけではないが、四大・五大・六大などの世界構成要素の働きによって、仮りに上下・方向を持たせているのである。

無想天は上にあり、阿鼻地獄は下方にあるとかいうわけではない。地獄も天界も、全世界のどこにでもあると、道元は説く。なお、「山水経」の巻の結びに近い箇所には、自然世界と生物世界と仏祖世界との相即の理を、道元は、水に因んで説示している。

十方とは、全世界であり、十方は仏土である。道元における世界は、仏国土である。玄沙の「尽十方世界、是一顆明珠」、即ち全世界は、一粒の明珠であるという語の道元の釈中には、「尽十方世界は、広大にあらず、微小にあらず。方円にあらず、中正にあらず。活潑にあらざ、露廻廻にあらず。さらに生死去来にあらざるゆゑに生死去来なり」とある。道元の論法では、この「あらず」の一つ一つは「へあり」でもある。尽十方世界は、大小・方円などを超越している。別の箇所、道元は、長沙の「尽十方界、是自已光明」を引く。全世界は、これ自己の光明であり、この光明の自己が、そのまま全世界である。光明を修証して、作仏し、坐仏し、証仏するのであるという。そして又、尽大地とは世界である。縦に三際をきわめて無始無終、横に十方にわたって無辺際のことをいう。道元は、雪峯の、「尽大地是解脱門、曳人不入人」(「諸法実相」)、即ち全世界は、仏法の解脱の入口であるのに、手を曳いて導かれながらも入ろうとしない、という語を引用し、又、

玄沙のいう、「尽大地一箇会仏法人不可得」(「三界唯心」)、即ち、全世界は、仏法でない所は一つもなく、人はその中にいるが故に、仏法を会得している筈なのに会得している人は得られないということ、道元は、詳細に参学して納得すべきであると説く。

「自己即仏」であると知的に了解することが、道元において、仏法を認識したことにならず、修証の行持の道環が重視される。まだ発心・修行・菩提・涅槃を体験していないものは、(即心是仏)(即心是仏)ではない。「わが行持すなはち十方の市地漫天、みなその功德をかうむる。……この行持によりて日月星辰あり、行持によりて大地虚空あり、行持によりて依正身心あり、行持によりて四大五蘊あり」(「行持」という。行持が、自己の尽十方世界を作って行く。世界は行持によって、一定の相に見られるのである。行持と無関係に、世界が実体的に存在しているのではない。道元によれば、行持のある所に悟りがある。(身心脱落)した時に現前する悟りの世界は、自己と二元的に対立することのない、世界と自己とが一如になった世界なのである。

以上において、クザーヌスは「知ある無知」に、道元は「正法眼蔵」に、本稿では資料を限定して、両者が、世界をどのように把握しているかについて考察した。クザーヌスは、長い瞑想と高揚の後に、道元は祇管打坐で身心脱落して、真理を捉えた。思想系統を異にする両者の差異性は大きい。クザーヌスにとって、世界は欠如的にはあるが、無限である。世界は、神の創造として

の被造物なのであり、唯一の神だけが、諸真理の真理として絶対性を有し、神だけが世界の中心で周辺であり、神の写像たる世界は、中心・周辺を持たない。道元において、世界は因縁所生である。世界は無限であり、無始無終である。世界は仏国土である。世界における一切は、八仏のいのちを生き、運歩しているのである。自受用三昧においては、自己と一如の世界が現前するのである。しかしながら、クザーヌスは、絶対的に最大のものは、一にして一切とし、道元は、一塵のなかに無量の諸仏ましますとい

い、共に、一即多・多即一とすること、又、世界における万物は分離されていないで、互に他の物なしには存在し得ず、一切は全体に属し、全体は多様性を持っていること、その他において類似性が見られるのである。

- (1) Nicolai de Cusa: *De docta ignorantia* II-1 [97]
- (2) *ibid.* II-2 [104]
- (3) *ibid.* II-3 [111]
- (4) *ibid.* II-5 [118]
- (5) *ibid.* II-5 [120] [121]
- (6) *ibid.* II-4 [113]
- (7) *ibid.* III-1 [185]
- (8) *ibid.* II-7 [130]
- (9) *ibid.* II-8 [132] [136]
- (10) *ibid.* II-9 [150]
- (11) *ibid.* II-11 [156]
- (12) *ibid.* II-12 [157] [162]

- (13) 「三十大千世界」(*tri-śaṣṭa-mahā-śaṣṭa-loka-dhātū*)は、古代インド人の想像力で構成された世界で、太陽系の十億倍とされる。現代科学が把握している宇宙の広さに、たとえていようと、仏教は、その思想体系内で自然学それ自体に独立の意義を認めてはいなかった。それ故に、内面的な心の考察は著しく発達したが、自然科学は発達しなかった。

- (14) 道元禪師全集(筑摩書房)上巻 p. 258
- (15) 全集 上 p. 60
- (16) 同 上 p. 369
- (17) 同 上 p. 367
- (18) 同 上 p. 122

(かさい・ただし、比較哲学、群馬大学教授)